

BRICs 諸国のいま

2010年代世界の位相

日 時: 2015年10月10日(土) 13:00~16:50 場 所: あすか会議室 東京日本橋会議室 あすか4+5

主 催: 京都大学地域研究統合情報センター

趣旨説明

BRICsのいまを分析する意義

村上 勇介

京都大学地域研究統合情報センター

「極ゼロ」あるいは「ゼロ極」と言いますか、「無極時代」と言われるように、アメリカ合衆国の覇権の低下や、新興国の台頭等々による世界的な地殻変動のなかで、東アジアを中心とする我が国を取り巻く環境がだいぶ変わってきていることは、みなさんご存知のとおりです。今世紀に入ってから状況と、2010年代、現在我々がいる状況とのあいだにも、変化があるかと思えます。

何が大きく変わったのかについては、二極になるかどうかわかりませんが、アメリカ合衆国と中国とを中心とする「無極」レベルの動きがあります。並行して、発展途上地域と大国との間にあるBRICs諸国の動きが注目されてきました。

今世紀にはいり、世界の政治経済の全ての面でBRICs諸国は着実にその存在感を増してきました。中国経済のつまづきが世界経済を震撼させているように、いまやこれらの諸国の動きを視野にいれずに世界の未来を語ることはできません。

その一方で、2010年代には、これら諸国の成長の背後にある課題も明らかになってきました。「21世紀の担い手」といった手放しの成長神話はいまや色あせています。BRICsを命名したエコノミストの「BRICsから、ロシアとブラジルが脱落するだろう」との見とおしが示すBRICs諸国の間の成長力の違いだけではありません。急激な成長を支えてきたガバナンスのあり方や国内の格差などが顕在化し、経済成長に大きな影を落としています。トップを走り続ける中国ですら、世界のなかでは未だ高い水準を維持してはいるもの

の、「新常態」という表現で2000年代までの高成長期とは異なる局面にはいつていることを認めています。もはや、右肩上がりの順調な経済発展を中長期の前提とすることはできません。BRICs諸国の今後、そしてBRICs諸国がグローバルな政治経済変動の重要なアクターとなった世界の今後を考える上で、経済成長を政治社会の動きのなかに位置づけ、その現状と課題を分析することが必要となっています。

そうしたことから、本シンポジウムは、BRICs各国の政治、経済、社会の現状をパノラミックに分析し、直面する課題を明らかにした上で、今後を展望することを目的としています。同時に、そうした作業をつうじて、BRICs諸国が直面している状況が、ほかの発展途上諸国や、ひいては日本やアメリカ合衆国、ヨーロッパなど先進国諸国の課題と共通するものがあることがみえてくるのではないかと。共通性がみえると相違点も照射される可能性があります。そうした可能性を探ることが本シンポジウムの一つの方向性として考えられます。

他方、繰り返しになりますが、BRICs諸国の状況が「無極」レベルをふくめた国際関係に与える影響を考えることがもう一つの方向性としてあります。本シンポジウムは、どちらかの方向で報告をお願いしているわけではありません。いずれの方向にせよ、BRICs諸国のいまを分析することをつうじて、2010年代世界の今日的位相を考察する足がかりとなることを期待しています。

BRICsは正式には5か国ですが、最後の「s」は小文字にしています。つまり、4か国を対象としています。インドについては押川文子先生、ロシアは宇山智彦先生、中国は渡邊真理子先生、ブラジルは舩方周一郎先生という順番でご報告いただきます。休憩をはさんで武内進一先生と天津留智恵子先生からコメントをいただいて、全体討論に入ります。それでは、よろしくお願いいたします。